



菜の花

66 編は詠み人知らずですが 指揮者によって。歌。賛歌 とあり、共同の礼拝に相応しい詩編です。

最初の言葉 全地よ、神に向かって喜びの叫びをあげよ。(66:1) を聞くととき、私たちは歡喜の壮大な世界にすぐに飛び込んでしまいます。神に ではなく 主に と呼びかける 全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。(100:1) の詩編 100 編を礼拝の「招きの言葉」として、私たちは聞いていて、諳んじていますので、心が沸き立つような、解き放たれるような喜びを味わいます。同じような言葉を 96, 98 編にも見出します。

御名の栄光をほめ歌え。栄光に賛美を添えよ。神に向かって歌え／「御業はいかに恐るべきものでしょう。御力は強く、敵はあなたに服します。全地はあなたに向かってひれ伏し／あなたをほめ歌い／御名をほめ歌います」と。「セラ いくつかの詩篇には何度もセラという言葉が亀甲括弧()の後に記されています。これは補足説明で、感嘆詞、ないし休止を示す音楽記号とされています。感嘆詞であれば、「オー」とか、「ヤー」とか賛美する人々は各自、自由に発したのでしょうか。

2連は「神の恐るべき御業」としてイスラエルの民の原点について記されています。神は海を変えて乾いた地とされた。人は大河であったところを歩いて渡った。それゆえ、我らは神を喜び祝った。(66:6) 忘れることのできない、エジプトでの奴隷生活からの解放の出発点です。

3 連は「試練」を歌っています。これもやっと出エジプトし、シナイの荒れ野を 40 年間、苦しい旅を続けた中で味わった恐怖、飢餓、枯渇の苦しみを歌っています。あなたは我らを網に追い込み／我らの腰に枷をはめ／人が我らを駆り立てることを許された。我らは火の中、水の中を通ったが(66:12) と、その試練は神が与えられたものであり、その試練によって練られて、ついに、あなたは我らを導き出して／豊かな所に置かれた。と感謝を捧げています。

最後の 4 連では「礼拝」を歌っています。わたしは献げ物を携えて神殿に入り／満願の献げ物をさげます。(66:13) 最初に「香りと共に、肥えた雄羊、雄山羊、雄牛」を焼き尽くす捧げものとしします。贖罪への感謝です。次に 神を畏れる人は皆、聞くがよい／わたしに成し遂げてくださったことを物語ろう。神に向かってわたしの口は声をあげ／わたしは舌をもってあがめます。(66:16) と、神の栄光と力の業について、相互に語り、聞き合って、信仰を分かち合い、そして共に賛美を捧げます。次に、神の前に罪を覚えて、わたしが心に悪事を見ているなら／主は聞いてくださらないでしょう。(66:17) と、神の赦しに生きる聖潔を誓い、最後に しかし、神はわたしの祈る声に耳を傾け／聞き入れてくださいました。(66:19) と感謝の祈りを捧げています。これが礼拝の形であったのではないかと思います。

『讚美歌21』は138「全地よ、神に向かって」が 66 編を賛美しています。これは 16 世紀の英国国教会で歌われた讚詠で、散文の部分を朗誦し、文末の韻文の部分をメロデーで歌う形の讚美歌です。

ジュネーブ詩編歌の 66 編は最も愛唱されている曲で、他に 98 編, 118 編にも用いられ、『讚美歌 21』の 152「みめぐみふかき主に」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-06> で歌われています。

<https://www.youtube.com/watch?v=zA-UbWptRI&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=65>